

---

# シンデレラ (CINDERELLA)

金城 ユウ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

シンデレラ (CINDERELLA)

### 【コード】

N3676C

### 【作者名】

金城 ヨウ

### 【あらすじ】

同期の同僚の女性からの電話。でも様子がいつもと違っていて…  
僕は彼女のいるバーへと向かった。

残業が終わり、会社から出たところで、携帯電話が鳴った。

電話の相手は、同期の田中翔子だ。たなかしょうこ表情を余り表に出さない、硬質の美人で「アイス・ドール」とからかったこともある。

人付き合いの悪い彼女とは、同じバーの常連ということで、僕は比較的交際を持っている人間になるだろう。

「はい。久高くたかです」

「あ、久高君。いま、アクアにいるんだ。きてー」

ずいぶんと酔っているらしい、いつもは酒量をわきまえ、飲んでいる時さえも凜としている彼女と同一人物とは思えない。

「ずいぶんと酔っているね」

「うん。まっっているよー」

言いたいことだけ言って、電話は切れた。

ただ彼女の様子から、ただ事でないのはわかる。彼女が、ああも酔っているのを、出会ってから6年、見たことがない。

「しょうがないな」

放っておく事も出来ず、僕は「バー・アクア」に足を向けた。

アクアに入ると、彼女はカウンターでグラスをかたむけていた。

薄暗いカウンターで、グラスを憂いを秘めた瞳で見つめる彼女は、その美貌もあいまって氷の彫像のようだ。

だが、店に入ってきたのが僕だと知ると、それは崩れた。

「久高くん。こっちこっちい」

普段の彼女の雰囲気からしたら、「あんた、だれ？」と聞き返さずにいられないほど、酔っている。

「どれだけ飲んだ？バーは酔いつぶれるとこじゃないぞ」

シンデレラ (CINDERELLA)

「いいじゃない。ねえ、のもつ」

僕は、ハイボールを注文し、一息つくと彼女に問いかけた。

「なにがあつた？」

「なによー。何かないと飲んじゃいけないのー？」

「なにかないと、そこまで飲まないだろ？」

彼女は、グラスに残ったカクテルを一気に飲み干した。

「振られたのよ。5年、付き合っていた……」

「村田係長か」

「知っていたの？」

「まあな……」

村田係長は営業2課の係長だ。既婚者で、8歳と5歳の子供の父親……つまり、彼女とは不倫の関係だ。

「バーテンダーさん、今度はウオッカベースでなにか」

グラスを持ち上げて注文する彼女の手から、グラスを奪い取る。

「飲みすぎだ。もうやめておけ」

「やだあ、もう一杯飲ませてよ。じゃ、久高君が決めても良いから」

「わかった。カクテルをもう一杯だけだぞ」

彼女に、念を押しバーテンダーに尋ねる。

「バーテンダーさん、シンデレラできる？」

バーテンダーは、うなずいた。

「シンデレラでいいな？」

「ロマンティックな名前ね。いいわよ。それで」

シンデレラが2杯カウンターに並ぶ。2杯なのは、自分の分も注文したからだ。

「ねええ、乾杯しよう」

「何に？」

「なんでもいい」

「じゃ、明日には、いつもの田中さんに戻っているように……乾杯」

「うん。乾杯」

彼女はカクテルに口をつけ、びっくりしたように僕のほうを見る。

シンデレラ (CINDERELLA)

僕はというと平然とグラスの中身を飲み干した。

「なにこれ、ミックスジュースじゃない」

「材料だけ見るとね。オレンジジュースとレモンジュース、パイナップルジュースを同量、シェイク。シェイクする際に氷を選んで、シェイクする時間を考え、完璧に混ぜるとノンアルコールカクテル「シンデレラ」になる」

「久高君、キライ」

彼女が、すねたように言ったが、僕は無視した。

「約束は約束。それに、もうシンデレラタイムだ」

僕は彼女を背負ってアクアを出た。彼女の口調はしっかりしていたが、もう立つて歩ける状態じゃなかった。

「久高君の背中、広いね。それに暖かい」

「そうか？」

それから、二人とも何もいわず無言で時間が流れる。彼女の住むマンションが見えてきたところで、僕の方から口を開いた。

「田中さん。僕じゃだめかな……」

「え？」

口に出してから、後悔した。

「ごめん。今、言ったことは忘れてくれ。このタイミングで言うのは卑怯だと思う。今度、ちゃんと話すよ」

「うん……ねえ、私からのお願いも聞いてもらえない？このまま泣いていいかな？服、汚してしまうけど……」

バーのカウンターでも彼女は泣いていなかった。必死に耐えているのだろうか……

その心の痛みを……

それを少しでも癒してやれるのなら……

「いくらでもどうぞ。田中さんの悲しみを背負っても、潰れたりし

ないから大丈夫」

「何よ。格好つけすぎよ」

僕はゆっくりと歩き、彼女の嗚咽を背中であら聞いた。

「久高君」

出社すると同時に僕を呼び止めたのは、田中さんだった。目の端が少しはれぼったいような感じがするが、表情をあまりださない、凜とした様子は、いつもの田中さんと変わらないように見えた。

「おはよう。田中さん」

「昨日は、本当にごめんなさい」

「昨日？ああ、あのこと。いえいえ、意外な一面を見させてもらいました」

「ちやかさないで」

少しでも恥らう姿を期待したが、ピシヤリと言われてしまった。

「じゃあさ、お詫びということで、アクア付き合っつてよ」

「お酒は……しばらくは……」

まあ、あれだけ飲んでいれば無理もない。でも。

「フロリダ、シャーリーテンプル、バージンチチ、ノンアルコールカクテルは、たくさんあるよ」

食い下がる僕に、彼女は折れた。

「わかりました。付き合います。それじゃ、また一緒に飲んでくれる。シンデレラ……」

そう言っつて、少しだけ恥ずかしそうに微笑んだ彼女はやはり美しく、僕を魅了した。

(後書き)

カクテルを題材に書いてみました。

カクテルやワインその他洋酒には、結構ネタになるエピソードが付随して、そのエピソードなどを聞きながら飲むと、結構楽しいです。(未成年の飲酒はだめですよ)

今回はノンアルコールカクテル・シンデレラをチョイスしました。漫画、<sup>バーテンダー</sup>Bartenderで取り上げられたので知っている人も多いカクテルだと思います。

作中のカクテルを紹介しておきます。

・シャーリー・テンプル：往年の名子役、シャーリー・テンプルにちなんで名付けられたカクテル。レシピは、ジンジャーエールまたはレモネードに、グレナデン・シロップをステア。(ステアとは、ミキシング・グラスに入れた氷と材料を、バー・スプーンで手早くかき混ぜること)

・フロリダ：オレンジ・ジュースとレモン・ジュース、シュガーシロップにビターズが数滴(1滴か2滴)をシェイク。ビターズはお酒ですが、ほんの数滴なのでアルコール分を感じることはまずありません。(ビターズ抜きでもOK)

・バージン・チチ：ウオツカベースの「チチ」のウオツカを抜いたノンアルコールバージョン。グラスにクラッシュドアイスを詰めておき、パイナップルジュースとココナッツミルクをシェイクしたものをグラスに注ぎ、パイナップルやオレンジをスライスしたものをデコレーション。

## シンデレラ (CINDERELLA)

・ハイボール：日本ではウイスキーのソーダ割りのこと。ウイスキー&ソーダの方がわかりやすいかな。本来は、お酒をソーダを含む飲料で割ったものの事を指します。

居酒屋にあるチュウハイとは、焼酎のハイボールが略されたものと言われています。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3676c/>

---

シンデレラ (CINDERELLA)

2008年11月7日07時52分発行